

BOCCACCIO, Giovanni *Il Decamerone* [Firenze], 1527 ボッカッチョ『デカメロン』



14世紀のイタリア自然主義文学と散文小説の父と称されるジョヴァンニ・ボッカッチョ (Giovanni BOCCACCIO, 1313?-1375) の代表作『デカメロン (十日物語)』は、1348年にヨーロッパ、とりわけフィレンツェで大流行したペスト (黒死病) が猛威をふるった描写から始まります。

この悲惨な伝染病は、同地で生まれた著者ボッカッチョが35歳の頃に流行しました。予防法も治療法もなく、看護もままならない中、感染者は昼夜を問わず亡くなり続け、街に放置された屍からは死臭さえ漂っていたといえます。僧侶も棺も間に合わず、死者が家族であっても

遺体を板に載せて運び、墓穴に入れることさえできれば最高の供養とされたようです。

ここから、著者は物語を大胆に展開させていきます。この伝染病の影響で社会構造や家族構成が崩壊する中、主役として登場する3人の若い紳士と7人の淑女を合わせた10人が、ペストの蔓延する都会を離れて手持ちの別荘を順に巡りながら危機をやり過ごそうと考えるのです。そして、最初に訪れた自然あふれる山荘での生活の中で、毎日午後に開くお話の会を骨子にして物語が繰り広げられます。ここで著者は、10人1人ひとりが1日1話を披露し、10日で100話を交わす設定で散文形式の100の短編を創作し、一つの物語に組み上げたのです。さらに、この作品の形を根拠に、彼らが過ごした10日間をギリシア語のデーカ (10) とメロン (日) という言葉に合成して書名にしています。

この作品の特徴の一つは、「女性のための文学」ともいわれてきたように、山荘で生活する10人の内の7人が女性であることです。作者は厳格なキリスト教社会での価値観が変化する中で、当時としては画期的な視点から男女間の葛藤や愛情表現を含んだ世俗的な小話を、彼女たちを含む10人に語らせています。その際、話の主役として商人、学者、修道士、王侯貴族など様々な階層の人たちを登場させ、この人物たちを軸に明るさや楽しさを交えて自由に表現させる手法を取りました。こうすることで、10人の生活者が伝染病のもたらす荒廃した気持ちから逃れ出て、希望を呼び覚ましていく情景を浮かび上がらせています。結果としてこの作品は、人間性の回復を旨とする「文芸復興」の呼び水として、文化史上の記念碑的名声を獲得したのです。

本書『デカメロン』の原典は、日本の室町時代初期にあたる1349年から1353年頃にかけてフィレンツェで書かれたもので、1469年から1470年頃に同地で刊行されたと考えられ、14世紀のイタリア・ルネサンス文学の端緒とされてきました。また、ダンテの『神曲』に対して『デカメロン』を「人曲」と見做すこともあり、そこに示された著者ボッカッチョの想像力と表現力の成果は、長い年月の中での風雪に耐えてきたもので、現代にも通じる部分を数多く残しています。それは、ステイホームならぬステイヴィラなど当時と対処法が酷似する昨今、改めて世界的な関心が寄せられていることを見ても明らかなのではないのでしょうか。

なお、本学図書館の所蔵本は1527年にジュンダ家が公刊したもので、斯界では「デカメロン 1527年版」とよばれています。